

**施設コンフリクトの当事者による捉え方についての一考察****—Xダルクのグループホーム移転における反対運動に焦点を当てて—**

○ 同志社大学大学院 社会学研究科 社会福祉学専攻 博士前期課程 神永尚輝 (010377)

キーワード：施設コンフリクト ダルク 薬物依存症

**1. 研究目的**

福祉施設の建設において、地域住民等による反対運動は施設コンフリクトと呼ばれる。その発生要因について小澤(2001)は偏見、スティグマ、差別を挙げている。たとえば障害関連施設の施設コンフリクトでは、障害当事者はスティグマを負わされている。スティグマ等を負わされる当事者がいることが福祉施設の施設コンフリクトの特徴である。それにもかかわらず、施設コンフリクトの先行研究において、当事者という用語は施設の職員や地域住民等を含んだ曖昧なものとして、十分に考慮されずに使用されている。

施設コンフリクトをめぐる先行研究では、福祉サービスを利用する当事者(当事者団体の場合はサービス事業運営者の当事者を含む。以下、当事者と略)の視点から分析した研究はほとんどない状況である。施設コンフリクトによって最も社会的不利益を被るのは当事者である。しかし、彼らは被害を受けるだけではなく、彼らなりの捉え方で施設コンフリクトに対処している。本研究では、当事者による施設コンフリクトの捉え方を明らかにすることを研究目的とした。

**2. 研究の視点および方法**

本研究では、2018年からXダルクのグループホーム移転に際して発生した施設コンフリクトを対象とし、エスノグラフィー法による質的調査を実施した。具体的には、1) Xダルクの機関紙等の資料の収集・分析、2) Xダルクのスタッフを対象にした半構造化インタビュー、3) Xダルクのデイプログラムや地域での活動の参与観察、を実施した。

研究の視点は、薬物依存症の障害特性とダルクの当事者団体としての思想が、施設コンフリクトの捉え方にどのように影響しているのかということに焦点を当てた。ダルクは薬物依存症の当事者団体である。薬物依存症は、その疾患になったこと自体に伴い強いスティグマや偏見に晒される。したがって、薬物依存症をもつ当事者の施設コンフリクト経験を取り上げることによって、施設コンフリクトにおける差別構造とその対処方法を明らかにできると考える。

**3. 倫理的配慮**

本研究は同志社大学社会学部・社会学研究科倫理審査委員会の審査の承認を受けている(申請番号:2023\_0007)。インタビューの協力者には文書と口頭にて研究の趣旨等を説明し、同意の署名を得て調査を行った。なお、本発表に関連し開示すべきCOIはない。

**4. 研究結果**

第一に、当事者には「依存症者」だけでなく「犯罪者」という自己認識があり、反対運動を差別としてだけでなく避けられないものとしても受け止めていた。そのため、地域住

民との対話には応じる姿勢をとることがわかった。

第二に、ダルクは当事者団体として主体的に解決する方法ではなく、仲介者による介入を望んでいた。しかし、十分な役割を果たす仲介者は不在だったため、地域住民と直接対峙するほかなく、それによって当事者は心的な苦痛を強いられたことが明らかになった。

第三に、当事者は地域住民に対して理解ではなく共存することを求めていた。この結果、施設コンフリクトの終結後は、地域行事等への参加を通して、地域のなかで依存症から回復できる姿を示すという戦略を採用していることがわかった。

## 5. 考察

本研究を通して、薬物依存症という障害特性やダルクの当事者団体としての思想が、地域コンフリクトの発生や解決の捉え方に影響していることが明らかになった。古川ら(1993)は、地域と施設との関係規定要因に「施設側」を挙げているが、詳細に述べられていない。本研究では「施設側」の要素に当事者の抱える障害特性と団体としての思想があり、施設コンフリクト時の地域との関係において強い影響をもたらしていることがわかった。この点は、今後の施設コンフリクト研究において考慮されるべきである。

施設コンフリクトの解決方法については、野村(2013)は「リスクコミュニケーション」を挙げている。しかし、これは激しい反対運動に直面する当事者には実施することが極めて困難であり、薬物依存症の障害特性やダルクの当事者団体としての思想を踏まえれば、別の解決方法を検討することが求められる。

本研究は、ダルク研究においても新たな知見を提示している。相良(2019)は、日常生活や仲間との関わりを「回復」の重要な要素として描いている。本研究では、12ステップを貫く「回復」の考え方が地域コンフリクトの捉え方にも示されていることを提示できた。それは「回復」の考え方を、自身の生活だけではなく、施設コンフリクトという地域との関係に援用することで、困難を克服する実践である。

本研究では、当事者団体の運営責任者の語りを中心に検討してきたが、グループホームに居住する当事者の語りについても分析する必要がある。この点は本研究の課題である。

## 参考文献

古川孝順ら(1993)『社会福祉施設ー地域社会コンフリクト』誠信書房

野村恭代(2013)『精神障害者施設におけるコンフリクト・マネジメントの手法と実践』明石書店

野村恭代(2015)「施設コンフリクトを契機とした新たなつながりの創造」『社会福祉研究』123, 65-72

小澤温(2001)「施設コンフリクトと人権啓発ー障害者施設に関わるコンフリクトの全国的な動きを中心にー」『部落解放研究』138, 2-11

相良翔(2019)『薬物依存からの「回復」ーダルクにおけるフィールドワークを通じた社会学的研究』ちとせプレス